

銀行員の働きすぎの研究

中央大学 前島賢士

1 目的

この報告の目的は、働きすぎの銀行員の働く動機や働きすぎの銀行員の持つ銀行業界の業界イデオロギーとの関連から銀行員の働きすぎを考察することである。

2 方法

そこで、データとして銀行員（以下、甲とする）に対して2016年11月に行った面接調査と2017年5月に電話にて甲に対して行った補足的な質問への甲の回答、元銀行員の著書を用いる。

3 結果

分析の結果、次のようなことが分かった。甲は1971年6月生まれの男性である。2016年11月現在の甲の週労働時間は60時間である。面接調査において、「現在、『働く（労働する）動機』を、『個性の発揮』、『自己実現』、『役割の実現』、『社会的存在証明』、『社交（つきあい）』、『生計の維持』の中から選ぶと、どれですか。複数を選んでもらってもかまいません」という質問を甲に対して行った。甲は質問に対して、「個性の発揮」、「自己実現」、「役割の実現」、「社会的存在証明」、「社交（つきあい）」、「生計の維持」と答えた。「役割の実現」に関して、甲は「きちんとお客様に対応する」と「融資課の人として責任を持って仕事をする」と述べた。「きちんとお客様に対応する」という甲の働く動機のよりどころとして、堅実主義という銀行業界の業界イデオロギーがあげられる。また、銀行業界の業界イデオロギーである堅実主義はイデオロギーであることから、堅実主義は自然化され、「自明のこと」とされる。堅実主義が自然化されるのに伴って、堅実主義をよりどころとする甲の働く動機である「きちんとお客様に対応する」も自然化され、「自明のこと」とされる。甲の働く動機は、甲において、「自明のこと」とされることから、甲の働く動機は甲にとって納得度のある動機として存在することになる。そして、この納得度を伴って、労働が進められていく。

4 結論

以上から、次のように結論づける。堅実主義をよりどころとした「きちんとお客様に対応する」という働く動機は、働きすぎの銀行員が銀行員として堅実主義を持っているがゆえに、働きすぎの銀行員にとって労働に対しての納得となり、労働を推し進めていく動機として強く存在する。